

準師範試験実施要項

▽第七十三次漢字部・かな部課題

○漢字部 次の作品二点〔何れも半切35cm×135cmに揮毫〕を提出する。

・規定《書体 行草書》

秋寒古戰場（市河寛斎）

読〓秋は寒し 古戰場

・臨書 王羲之「集王聖教序」十五字

五十七部譯布中夏宣揚勝業引慈雲

読〓五十七部を（捻（總）將し）譯して中夏に布き、勝業を宣揚し、慈雲を（西極より）引き

○かな部 次の作品二点〔半切35cm×135cmに揮毫〕を提出する。

・規定《書体自由》

嘆きつつひとり寝る夜の明くる間は いかにかに久しきものとかは知る

（右大将道綱母）

註〓あなたがいらつしやらないで一人寝る夜の悲しいことです。夜明けまでがどんなに長く思われるか、あなたはわかりになりますか。わかっただけでないでしょうね！

・臨書 高野切第三種（伝 紀貫之）

しらゆきのともにわがみは ぶりぬれど こころはきえぬものにぞありける

▽第四十三次詩文書部課題

次の作品二点〔何れも半切35cm×135cmに揮毫〕を提出。※形式は縦作品に限る。

・規定《原文を尊重すること》

下闇に遊べる蝶の久しさよ（松本たかし）

註〓「下闇」木下闇に遊ぶ蝶を詠んだ柔らかな抒情の句。ひらひらと舞う蝶の姿に、作者は親しみを感じているのである。作者の行き届いた写生の力を感じる句。

・臨書 牛橛造像記 五字

弥勒像一區

読〓弥勒像一區

― 受験についての注意 ―

一、受験資格 漢字・かな・詩文書とも六段。かつ満十八才以上で『日本書道院

展出品経験者』（二〇〇四年四月一日生まれまで認める）。

一、受験料 六千円（漢字・かな・詩文書の別）受験料は作品と別封とし、郵便振替にて同時に本院宛に送付のこと。

一、日本書道院展に一回以上出品の者（部門不問）。第72回展出品も可。咲蕾展は二回以上。

一、切 四月二十日 発表六月号

一、作品には申請書に貼付の出品票を使用して六段になった年月（日本書道誌発表の月）を必ず記入して添付すること。又、作品の左下隅にも同じく鉛筆で段位・支部名・氏名を記入のこと。

一、不合格者（規定違反も同じ）はその氏名を発表しない。

一、受験作品は白画仙紙を用い、準師範受験申請書を作品と共に提出のこと。また、封書には必ず「準師範応募」と朱書のこと。

一、準師範受験申請書は、返信料八十四円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、提出した作品は一切返却しない。

○月刊「日本書道」四月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

○出品作品には雅印押印のこと。

○師範受験時には日本書道院展出品が二回以上、「咲蕾展は三回以上」必要となる。受験の際は注意すること。

▽第十五次硬筆部準師範課題

・規定

古くから神々が住まわれるとされる日本の山々は聖なる場所 姿も美しい。

・臨書 蘭亭序（王羲之） 十六字

俛仰之間、以為陳迹。猶不能不以之興懷。

読〓俛仰の間に、以て陳迹と為る。猶お之を以て懐いを興さざる能わず。註〓みるみるうちに過去の跡となってしまうが、なおそれでさえも心を動かさずにはられないのである。

一、受験資格 六段

一、受験料 四千円

一、準師範受験申請書は、返信料八十四円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、切 四月二十日 発表六月号

一、作品には申請書に貼付の出品票を使用して六段になった年月（日本書道誌発表の月）を必ず記入して添付すること。また、封書には必ず「準師範応募」と朱書のこと。

○月刊「日本書道」四月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

昇段・級試験実施要項

▽第一三三回漢字部・かな部課題

○第一部 「半切35cm×135cm」

次の漢字又はかな（各書体自由）を縦に揮毫したものの一点を提出。

漢字部

庭前幽草忽如積 江上落花渾欲飛（劉崧）

読|| 庭前の幽草忽ち積むが如く 江上の落花渾て飛ばんと欲す

注|| 庭の中に草が積み重なるように茂り、江のほとりの花は皆散りかけている。●幽草|| 深く茂った草。

かな部

由良の門を渡る舟人梶を絶え 行方も知らぬ恋の道かな（曾禰好忠）

注|| 由良の海を漕ぎ渡る船人が櫓をなくして、行方も定まらず漂っていくように、どうなるかわからない私の恋路であることよ

一、受験資格 漢字・かなとも二級以上のもの

一、受験料 一点につき 三千元。成績により六段以下の相当級に編入する。

②漢字・かな受験者の事情により昇段試験の課題（漢字・かな）を半切1-2（35cm×68cm）に二点（形式を変えるか縦・横にする）揮毫しても受験することができる。但し、現在二級・一級・初段・二段の者は一点でもよい。

○第二部「半紙」次の漢字（楷書）又はかな（書体自由）を揮毫したものの一点

・漢字部

花鳥装春（程嘉燧）

読|| かちようはるをよそおう

注|| 花さき鳥がなくて春景色をかざる。

・かな部

侘助のひとつの花の日数かな（阿波野青畝）

注|| おだやかな日和がつづく。侘助の一輪の花をここ数日楽しんでいる、の意。作者の静かな心境が表われた句。

一、受験資格

漢字・かなとも二級以下のもの「漢字作品には支部名・段級・氏名（号）を競書と同じく筆によって揮毫する。かなの場合は名（号）又は雅印を捺した上に、作品左下隅にも鉛筆で段級と支部名、姓号を記入する。」

一、受験料 一点につき、千円。成績により一級以下の相当級に編入する。

▽第四十三回詩文書部課題

○第一部 「半切」次の俳句（原文を尊重すること）半切35cm×135cmに揮毫したものの一点

※形式は縦作品に限る。

・白露に鏡のごとき御空かな（川端茅舎）

注|| 「露」朝露にびっしり濡れた野原に、秋空は高く澄んで、まるで鏡のように明るい。色彩対称の美しい句。

一、受験資格 二級以上のもの

一、受験料 一点につき、三千元。成績により六段以下の相当級に編入する。

②詩文書受験者の事情により昇段試験の課題を半切1-2（35cm×68cm）に二点（形式を変えるか縦・横にする）揮毫しても受験することができる。但し、現在二級・一級・初段・二段の者は一点でもよい。

○第二部 「半紙」次の俳句（原文を尊重すること）を揮毫したものの一点

※形式は縦作品に限る。

・残雪やごうごうと吹く松の風（村上鬼城）

注|| 「残雪」残雪と春を告げる強風とが早春のつめたさと息吹きとを感じさせる。もの静かな一面、このように動的な早春の頃を捉えた句もめづらしい。

一、受験資格 二級以下のもの

一、受験料 一点につき、千円。成績により一級以下の相当級に編入する。

一 出品についての注意

一、〆切 四月二十日 発表六月号

一、作品には四月号発表の競書成績の段級と支部名又は府県名、氏名又は号を書いた小票（たて11センチ×よこ4センチ・競書用出品券使用可）を作品の左下に貼付する。又作品左下隅にも同じく鉛筆で段級・支部名・氏名を記入のこと。「級のなものは新（shin）と示すこと」

一、一級以上のものは第一部「半切」へ出品のこと。

一、各部で昇級できなかったものは氏名を発表しない。（規定違反も同じ）

一、昇級試験の作品は競書作品と別にし、必ず封書に「昇試」と朱書する。

一、受験料は郵便振替にて作品と同時に本院宛に送付のこと。

一、提出した作品は一切返却しない。

◎月刊「日本書道」四月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

◎出品作品には雅印押印の習慣をつけること。

